



Title	わが国の中年期死亡に関する統計的観察：中年期死亡率性比の動向とその社会医学的考察
Author(s)	逢坂, 隆子
Citation	大阪大学, 1987, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35671
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【4】

氏名・(本籍)	逢	坂	隆	子
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	7787		号
学位授与の日付	昭和	62年	5月	11日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	わが国の中年期死亡に関する統計的観察 —中年期死亡率性比の動向とその社会医学的考察—			
論文審査委員	(主査) 教 授	朝倉新太郎		
	(副査) 教 授	鎌田 武信	教 授	中川 米造

論文内容の要旨

[目的]

わが国では1960年代以降中年期の特に男子の死亡率の低下の遅れが目立ち、そのため、中年期の死亡率性比（男子死亡率／女子死亡率）が年々増大する傾向にある。そこで死因別死亡率性比の動向について中年期に焦点をあてて述べると共に、死亡率性比に影響をおよぼすと考えられる社会経済指標との関連およびその動向についてもあわせて検討を加え、その社会医学的意義を考察した。

[方法ならびに成績]

厚生省「人口動態統計」「人口動態特殊報告」「社会福祉行政業務報告」「国勢調査報告」、総理府統計局「社会生活統計指標」、国税庁「統計年報」等を用いた。年齢5歳階級・死因別死亡率性比の年次推移を検討し、さらに、中年期死亡率性比に種々の社会経済指標がどのように影響しているかをみるために、都道府県別中年期死亡率性比（総死亡および死因別）を従属変数とし、社会経済指標（家族形態の一つの指標と考えられる男子未婚者率、家の広さをあらわす世帯あたり畠数、貧困の指標の一つと考えられる生活保護率および男子失業者率、富裕度をあらわす所得、生活の荒廃や不満足と関連をもつと思われるアルコール消費量、古い生活習慣と関連のある食塩摂取量）を独立変数として重回帰分析を行い、F値が2.0以上のものを順次回帰式に加えた。さらに比較のため、全年齢訂正死亡率性比（総死亡および死因別）を従属変数として同様な重回帰分析を行った。なお、ここでは中年期は35～59歳とする。結果は次のとおりである。

1) 中年期の特に男子の死亡率の改善の遅れのために、中年期の死亡率性比は年々増大傾向が著しく、1960年までは年齢5歳階級別死亡率性比曲線は思春期と老年期にピークをもつ二峰性であったが、1965

年以降中年期にもう一つのピークをもつ3峰性となっている。

中年期にみられる死亡率性比曲線の山は先進欧米諸国とのそれと比較すると特異な現象である。死因別にみても、心疾患、自殺、肝硬変、糖尿病、胃・十二指腸潰瘍などで中年期死亡率性比の増大傾向が目立つ。

2) 1931年～1935年生まれをピークとして年齢5歳階級別死亡率性比曲線の山が年々高齢の方に移動、コホート現象が認められ、死因別にみても脳血管疾患、心疾患、糖尿病、自殺、肝硬変による死亡率性比曲線でコホート現象がみられる。

3) 以上のような特異な動向を示す中年期死亡率性比の地域差はアルコール消費量の地域差や男子失業者や生活保護者率であらわされるような貧困や雇用不安の地域差と強く結びついたものであり、1960年当時とくらべさらにその傾向が強くなってきている。

[総括]

すでに指摘したとおり、中年期、ことに男子の死亡率もまた、アルコール消費量や男子失業率であらわされるような社会経済指標の地域差と強い関連を有するが、死亡率性比の方が、わが国の女子の飲酒量が男子とくらべてきわめて少ないという特徴のためによりアルコール消費量の地域差との関連が強くあらわれている。近年疫学研究や動物実験において高血圧、脳卒中、悪性新生物等の発症にアルコールが関与していることが指摘されはじめている。わが国のアルコール消費量は年々増加しており、アルコール消費量が増えつつある時代に青年時代を過ごし、アルコール消費量の伸びとともに生きてきた現在の中年男子の健康にアルコールが影響していることは多いに考えられうる。1931年～1935年生まれを中心とする人々は栄養不足で生长期をおくり、戦後の混乱期に青春時代をおくり、戦後の復興期の中心になってきた世代であり、今また、身体的には老化の入り口にありながら、社会でも家庭でも「大黒柱」として世の荒波を一身に受ける年令層である。他世代とくらべて経済面でも住宅、教育の負担に最もあえぐ年代であり、余暇時間も最も少なく、自殺率、精神障害の受診率も高い。今回の結果からみて、現在わが國の中年期死亡率性比にみられる現象は1931年～1935年生まれを中心とする世代がもって移動している死亡率性比増大のピークと現在の中年期の特に男子のおかれた社会経済状況がひきおこす死亡率性比増大傾向とが相合わさって生じていると考えられる。危険な条件にかこまれた社会的存在としての中年期に焦点をあて、この年令層にまとをしぶった総合的対策がぜひとも必要である。

論文の審査結果の要旨

1960年代以降、わが國の中年期の特に男子の死亡率改善の遅れが著しく、1978年に著者らが指摘して以来、社会的にもひじょうに注目されている。本研究は死亡率性比（男子死亡率／女子死亡率）の動向を中年期に焦点をあてて検討を加え、その社会医学的意義を考察したものである。本研究によりわが國の中年期死亡率性比は

(1) 男子中年期死亡率の改善の遅れのため年々増大が著しく、脳血管疾患、心疾患、肝硬変、その他多

くの主要な死因で増大が認められる

- (2) 1931年～1935年生まれを先頭とする世代と一致して増大しており、コーホート現象が認められる
 - (3) その地域差はアルコール消費量を含めた生活環境要因と深い関連を有している
- ことが明らかになった。

以上の知見は公衆衛生学上、極めて重要なものであり、学位に価すると認める。